

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院生研究

2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 21 世紀社会デザイン 研究科 比較組織ネットワーク学 専攻		
研究代表者 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	21 世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻 博士後期課程 4 年次	谷口 起代	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	21 世紀社会デザイン研究科・教授	内山 節	印
自然・人文 ・社会の別	社会	個人・共同の別	個人
研究課題	コミュニティ活動における「共創」の類型化の試み		
研究組織 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	21 世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻 4 年次	谷口 起代	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額) 197,800 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、コミュニティ活動において、地域課題の解決に向けて取り組む人々の有機的なつながりを構築し、新たな活動を生み出すキー概念として「共創」に着目する。「共創」は、近年、異分野間の多様な主体が協力し、共に新たな価値や商品または手法等を創出することを表す言葉として、ビジネスやまちづくり等の領域で広まっている概念である。本研究では、障害により通常の世界を送ることが困難な状況にある生活弱者と、共に活動を創ってきた実践における「共創」のダイナミズムをとりあげ、その類型化を試みる。2014 年度立教 S F R 交付期間内には、①概念整理、②フィールド調査、③分析の手順で、以下 3 つの事柄を明らかにする。1) 「共創」の研究の動向と類似の概念との相違、2) 「共創」の関係に基づいて展開されている様々な活動の成立条件と特徴、3) 「共創」に労働 (i.e., 障害者の雇用形態) がどう関与するか。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

{ 共創 } { コミュニティ活動 } { 障害者運動 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 【 概 念 整 理 】**

近年、「共に創る」という関係性において生じるダイナミズムに着目し、それが開発や創造の鍵となるという意味において「共創」の概念は浸透しているが、メカニズムの解明や理論化は十分にすすめられていない。本研究では、コミュニティ活動において効果のある「共創」に働くメカニズムを明らかにすることを念頭に、近年の「共創」概念がこれまでどのように使われているか先行研究の分析を行い、コミュニティ活動において関係性に着目した理論(社会関係資本や相互作用)と「共創」との関係を整理した。文献研究で、「共創」の概念化に向けて導き出した事柄は以下3点にまとめられる。

1) 「共創」という用語は、保健医療福祉分野(とくに地域福祉)やコミュニティ活動(小松ほか 2010)、社会システム工学(上田 2004)、経営組織論(清水・前川 1988; 吉田 2001)、コミュニケーション論(片岡・池田 2013)などの領域で使用されている。これらの分野での「共創」の使われ方は一貫しておらず、異分野間の「共同」や「協働」における困難やジレンマを超えるキーワードとして使用し、「共創」の条件を提示しているものもあれば、単に「異分野の者が集まり、共に作業をすること」程度の意味合いで使用しているものもある。このうち、理論化が進められている例としては、経営・組織論における、ホンダ(本田技研工業株式会社)のプロセス重視のマネジメントによる創造のプロセスのモデル化(吉田 2001)や、マエカワ(前川製作所グループ)が採用している自律分散型システムを「場」という概念を導入して検証した「共創する場」の理論(清水・前川 1988)がある。

本研究に密接に関係する障害福祉や保健、看護等の分野では、「当事者」と「共に創る」というプロセスの重要性は認識されており、実践報告として発表されている。保健医療福祉領域の論文検索サイト「医中誌 Web」を用いたキーワード検索では、タイトルと抄録に「共創」を含む論文は18件(2014年6月5日)検出された。これらを大別すると、保健医療福祉の専門家間や制度やしくみ構築をする側における「共に創る」プロセスを指すものと、ケアやサービスの提供者(保健医療福祉従事者)とサービス受給者(患者やメンバー)と「共に創る」プロセスを指すものの、2つの意味合いで使用されてきている。この検索結果からは、保健医療福祉分野における「共創」という語の浸透度は浅く、「共に創る」プロセスとはいかなるものかについての議論は、一部、認知症の地域ケアや地域保健活動の領域等ではじまったばかりであることが明らかになった。

2) 人と人との「相互作用」が実態を創り出すという理解は、保健医療福祉分野におけるケア論、援助技術論、支援論等において重要な位置をしめ、その研究は膨大な蓄積がある。たとえば、個体間の関係構築に対して有効な知見を提示している理論としては、社会心理学領域で有名なブルーマーのシンボリック相互作用論がある。また、社会福祉領域では、エコロジカルソーシャルワークを提唱したジャーメインの交互作用論がある。また、ケースワークやグループワークを行う際の有効な知見を提示しているボウルビィのアタッチメント理論も、個人間の相互作用への理解を前提としたものとして捉えることができる。

このように保健医療福祉領域において人と人の関係性に着目した理論は数多く存在するが、その多くは、個々の関係性が構築されていくプロセスや自己概念の生成プロセスの解明を目的とする傾向がある。文献研究からは、「共創」の概念化には、「共に創る」という関係にあることで特異的に生じるダイナミズムを捉えることが重要であり、人と人との間に生まれる「相互作用」の理解をもとに、さらにこの特異的に生じるダイナミズムの解明を行う必要性が示唆された。

3) パトナムに代表される社会関係資本論は、本研究と同様、コミュニティにおける人と人の関係性の重要性を訴えそれを社会構築の要と捉えるものである。「信頼、規範、互酬

研究成果の概要 つづき

性」(パトナム) や、「恩義、期待」(コールマン) といった、人々の関係によって構築される事柄を測定して、社会関係資本の充実度を評価する研究が盛んに行われている。文献研究からは、コミュニティ活動において重要な「信頼、規範、互酬性」等がいかんして構築されるのかという社会関係資本の生成のプロセスへの洞察は十分に行われていないことが見受けられた。本研究では、障害や疾病を抱える等、社会的弱者と「共に創る」という「共創」の関係性にある者同士が活動継続の過程において変容を繰り返しながら関係性を育み活動を創っていくさまを個人個人のインタビューから明らかにしていくが、そのことで、社会関係資本研究において不十分であった社会関係資本の生成のプロセスに関する一定の洞察を提供することができると期待される。

2. 【フィールド調査】

障害を持つ者と共に創る、「共創」の関係に基づいて展開されている活動の成立条件や特徴を明らかにするため、以下の団体を訪問し、団体設立の経緯、理念、現在の活動形態、これまでに直面した課題、今後の課題、支援者／当事者という枠組みの有無に関して聞き取り調査を行った。さらに、当事者・支援者双方のメンバー個人個人にインタビューを行い、活動に参加した経緯、現在抱えている課題を洗い出した。訪問が適わなかった団体の活動については主にニュースレターや手記をもとに情報を収集した。訪問した団体は、わっぱの会(愛知県)、C I L たすけっと(宮城県)、被災地障害者センター元県南支部、石巻支部(宮城県)、やどかりの里(埼玉県)。手記による調査を行った団体は、理化学工業(神奈川県)、べてるの家(北海道)である。

この調査から明らかになったこととして、1) 「共創」を活動の基盤とする団体の中には、「支援者／当事者」の関係を堅持しているもの、「支援者／当事者」の枠組みは存在するがそれを緩和するしくみを内包しているもの、「支援者／当事者」の枠組みを意図的に放棄することで成立しているものがある、2) 各団体は、給与体系、新規参加者へのオリエンテーションにおける工夫、会議の形態などにおいて「共創」を具体化するしくみを持っている、3) 「支援者／当事者」の枠組みの有無以上に、その団体が「共創」を実現するために持っている「しくみ」が、そこで生まれる「共創」のあり方に影響を与えている、4) 「支援者／当事者」の枠組みを堅持している団体(例：C I L たすけっと)は、障害者運動において障害者個人の権利の獲得をめざしてきた経緯があり、「支援者／当事者」の枠組みを放棄した団体(例：わっぱの会)は、障害の有無しに関わらず共に生きる権利の獲得を目指してきた経緯がある。これらのフィールド調査からは、「支援者／当事者」の枠組みを堅持している団体の中にも、掲げている理念や運営方針の違いがあり、「支援者／当事者」の間で構築される関係性はそれぞれ異なることが明らかになった。たとえば、「C I L たすけっと」と「やどかりの里」は「当事者／支援者」の枠組みを持つ団体であるが、そこで構築されている関係性は大きく異なる。そのことから、「支援者／当事者」という枠組みの有無で「共創」の類型化を試みることの妥当性の検討が必要であることが判明した。

3. 【分析】

2で調査を行った団体において障害者の働きを「労働」と位置づけている団体のうち、「わっぱの会」の雇用形態において詳細を分析した。「わっぱの会」では、障害者と健常者が共に働く「共働事業所」という形態の職場を持ち、そこで働く者は、障害の有無や生産性や効率、能力に関係なく一律の所得保障をする「分配金」制度を持っている。この「分配金」と「共働事業所」は、「わっぱの会」の理念である「共に生きる」ことを具現化するしくみ——「共創」の関係性を維持するしくみ——として機能していた。また、「わっぱの会」の活動に新たに参加した者へのインタビューからは、これらのしくみが、新規参加者に「共に働く」という理念を体得し、わっぱの会への帰属意識を高め、結果として、活動の継承者を育てる作用を持っていることが見受けられた。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文
該当なし

② 図書
該当なし

③ シンポジウム・公開講演会等
該当なし

④ その他

- ・ 博士学位申請論文 執筆と提出
「『共創』概念の研究－ヘルスプロモーションの思想と実践」
- ・ 研究報告書に本研究の文献研究によって得られて知見を挿入
「孤独死の予防を目的とした福島県いわき市等被災地域に住む高齢者の置かれている生活環境の基礎調査」
- ・ 研究会発表：「共に活動を創る」場に生じるダイナミズム
コミュニティ・コーディネーション研究会
N P O 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク
2014年7月18日
- ・ 研究会発表：「わっぱの会」の労働
コミュニティ・コーディネーション研究会
N P O 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク
2014年11月21日
- ・ 研究会発表：コミュニティ活動における「共創」と「支援」
コミュニティ・コーディネーション研究会
N P O 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク
2015年2月20日